

ツール・ド・おおすみ参加者調査 —県内・県外参加者の差はどこにあるのか—

坂口俊哉*, 北村尚浩*, 隅野美砂輝*, 黒川 剛*

はじめに

ツール・ド・おおすみサイクリング大会は、鹿屋市市制60周年を記念して2001年に第1回大会が開催され、現在では、大隅半島を広域活用するサイクリングイベントとして定着している（ツール・ド・おおすみホームページ）。2018年11月24日、25日に開催された第18回大会では、2日間で4つのコース（SPコース約30km, Sコース約150km, Aコース約110km, Bコース約70km）が設定され、述べ489人が参加した。当センターでは、2017年度から、このイベントを対象として参加者の実態調査を実施してきた。この継続調査は、スポーツイベントが地域の活性化にどのように結びつくのかを明らかにすることを目的としたCASE（Community Activation through Sporting Event）プロジェクトの一環として企画・実施されたものである。

過去を振り返れば、スポーツイベントは、主にスポーツの振興を目的に開催されてきたが、近年ではイベント開催による経済波及効果や観光産業の振興という側面が期待され、イベント開催の目的が地域活性化と強い関わりを持つようになってきた（山口ら1991）。また、日本国内では、2020東京オリンピック・パラリンピック、ラグビーワールドカップなど、世界的スポーツイベントの開催を控え、スポーツイベントが国や地域の活性化に与える影響に対する注目がこれまで以上に高まっている。さらには、スポーツ庁が示した「スポーツによる地域・経済の活性化」の方針も、このような流れを後押ししているように思われる。

スポーツイベントによる地域活性化の内容として原田（2002）は、①スポーツ施設や、アクセス道路、公園などの関連施設の整備による社会資本の蓄積、②イベント参加者による宿泊や飲食物販による消費の誘導効果、③大規模イベントのホストとなる都市住民の地域連帯感の向上、④イベント開催都市のイメージ向上効果といった様々な成果を上げている。しかし、これ

らの成果が得られるか否かは、スポーツイベントの内容や性質（種目や競技志向の有無）、規模（参加者数や開催日数）などの要因に左右される。特に地方都市で行われる小規模のイベントでは、いかにして参加者を維持していくのかという事が重要課題となっており、上記のような地域活性化のメリットを大会主催者や地域住民が感じられないイベントも数多く存在することは想像に難くない。鹿児島県内では、ランニングイベントの競合によって、イベントの廃止や内容の変更が報告されるなどⁱ、参加者の確保と同時に開催費用の確保も現実的な課題となっているⁱⁱ。

スポーツイベントが地域の活性化に与える影響については、これまでに様々な研究が行われており、近年ではスポーツ・ツーリズム研究の文脈で取り扱われることも多い。ツーリズムの視点では、スポーツイベントが地域経済に及ぼす波及効果が期待され、一般的な旅行者を対象としたものと同様に、インバウンド参加者や「圏外からの参加者」ⁱⁱⁱをいかに確保するかが注目されている。一方で、本研究で着目した「ツール・ド・おおすみ」の様に、地方都市で開催される小規模のイベントでは、「海外」からの参加者よりも「鹿児島県外」からの参加者をマネジメントすることの方が現時点では現実的な課題であろう。本稿では、このような問題意識から、本調査で得られたデータをもとに、以下の視点から分析した結果を報告する。具体的には、鹿児島「県内」と「県外」の参加者では、何に違いがあるのかという視点から分析を進めた。

この視点は、同じスポーツイベントの参加者の中でも、「トラベルコスト」が大きく異なるであろうという仮定から導き出されたものである。居住地からイベント開催地までの移動には、交通費などの直接的な経済コストだけでなく、物理的な移動時間のコストもかかる。こうしたトラベルコストに差のある「県内」「県外」の参加者間では、参加の動機や、イベントの評価にも差があることが容易に想像されるが、どのような

* 生涯スポーツ実践センター

違いがあるのかについてはよく解っていない。また、予想通りに何らかの差異があるのであれば、「県外」居住者をターゲットとしたイベント企画やプロモーション戦略を検討する上で重要な資料が提供できることが期待できると考えた。

以下では、研究の方法と分析結果、考察とまとめへと続く。

方法

1) データの収集

本研究では、2018年11月24日、25日に鹿児島県鹿屋市霧島ヶ丘公園をスタート・ゴールとして開催された「第18回ツール・ド・おおすみサイクリング大会」の参加者を対象として得られた調査データを分析する。調査計画では、イベント二日目となる11月25日に参加者がゴール後に回答するものとして実施し、インターネットアンケートサイト「Google フォーム」を用いた調査を行った。調査員は、参加者のゴール直後に参加者へ調査協力を口頭で依頼すると同時に、ゴール受付付近で、調査への協力依頼と回答用インターネットサイトのQRコードを印刷したプリントを配布した。協力に同意した参加者は、参加者自身の携帯電話か調査実施者が準備したiPadを用いてアンケートサイトにアクセスし、回答を行なった。

調査内容は、①個人的属性（性別、年齢など）、②大会への参加行動（参加回数、参加コースなど）、③参加動機、④大会評価（大会の企画・運営に関わる15項目とイベント全体の満足度に関する1項目、5段階リッカートタイプ尺度など）、⑤イベント参加形態（同伴者、宿泊の有無など）、⑥大会参加費用（宿泊費、イベント参加支出総額など）、⑦大会参加に伴う観光行動（観光行動の有無、訪問した観光地など）の項目である。この調査では293名の参加者から回答を得たが、満年齢が20歳以上で居住地に記入漏れのない270名を分析の対象とした。なお、上記の質問項目は、実行委員会との協議によって決定され、調査結果については、実行委員会などの関係者にフィードバックされている。

主催者発表の参加者数は初日54名、二日目435名であった。

2) 分析方法

まず、全体の傾向を把握するために全項目について

単純集計を行なった。その後、参加者の居住地によって、鹿児島「県内」の参加者と「県外」の参加者の2群に分類し、「県内」参加者と「県外」参加者の回答について比較検討した。

参加動機については、いずれも「あてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらでもない」「ややあてはまる」「あてはまる」の5段階のリッカートタイプ尺度で測定した。それらの5段階評定順に1から5までの得点を与え、間隔尺度を構成するものと仮定して数値化した。また、満足度については、大会運営に関する15項目と、大会全体に対する満足度を「不満足」「やや不満足」「どちらともいえない」「やや満足」「満足」の5段階で測定し、上述の参加動機と同様に数値化した。

次に、「大会全体の満足度」の評価得点を従属変数、「大会運営に関する評価」15項目の得点を独立変数として、重回帰分析を行い、ステップワイズ法によって独立変数の選択を行なった。この分析では、「サンプル全体」「県内」「県外」参加者の3通りの分析を行った。分析にはIBM SPSS Statistics 25を利用し、変数の選択基準として5%有意水準を採用した。

以下では、サンプルの属性と、参加動機、満足度評価と重回帰分析の結果について報告する。

結果

1) サンプルの属性（表1）

表1. サンプルの属性

項目	属性	県内		県外		全体	
		n	%	n	%	n	%
性別	男性	165	93.2%	83	89.2%	248	91.9%
	女性	12	6.8%	9	9.7%	21	7.8%
	N.A.	0	0.0%	1	1.1%	1	0.4%
年代	20歳代	24	13.6%	4	4.3%	28	10.4%
	30歳代	34	19.2%	15	16.1%	49	18.1%
	40歳代	57	32.2%	38	40.9%	95	35.2%
	50歳代	46	26.0%	23	24.7%	69	25.6%
	60歳以上	16	9.0%	13	14.0%	29	10.7%
	N.A.	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
参加回数	初めて	70	39.5%	46	49.5%	116	43.0%
	2回目	43	24.3%	17	18.3%	60	22.2%
	3回以上	64	36.2%	30	32.3%	94	34.8%
	N.A.	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
同伴者	一人で	61	34.5%	37	39.8%	98	36.3%
	家族連れ	31	17.5%	15	16.1%	46	17.0%
	友人・知人	85	48.0%	41	44.1%	126	46.7%
	N.A.	0	0.0%	0	0.0%	248	91.9%

分析対象となった270名の回答者のうち、居住地が鹿児島「県内」の参加者は177名、「県外」の参加者は93名であった。居住地の異なる2群間で男女比に有意な差は見られず、両群とも9割程度が男性であった。本イベントへの参加回数についても、居住地間で統計的に有意な差は認められず、サンプル全体では「初めて」(43.0%)、「2回目」(22.2%)、「3回以上」(34.8%)となった。今年度の大会は18回目の開催であったが、4割以上が新規参入の参加者であることから、参加者のリピート率を高めることができれば、参加者規模の拡大の可能性が高いイベントである。また、イベント参加にあたっての同伴者でも、居住地間で統計的に有意な差は認められず、サンプル全体では「友人・知人」(46.7%)が最も多く、「一人で」(36.3%)、家族連れ(17.0%)であった。

2) 参加動機

表 2. 居住地別にみた動機の平均得点

項目	県内 (n=177)		県外 (n=93)		全体 (n=270)	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
風景・観光スポットを楽しむ	4.15	1.25	4.07	1.20	4.10	1.21
地域の歴史や文化に触れる	3.39	1.13	3.33	1.15	3.35	1.14
地元の美味しいものを食べる	4.34	0.96	4.21	1.11	4.26	1.06
地元の人との交流	3.86	1.06	3.89	1.07	3.88	1.06
他の参加者との交流	3.75	1.12	3.85	1.08	3.81	1.10
仲間との交流	3.71	1.30	3.93	1.21	3.86	1.25
家族との交流	2.67	1.39	3.15	1.40	2.98	1.41
招待選手や鹿屋体育大学自転車競技部選手との交流	3.46	1.32	3.70	1.11	3.62	1.19
宿泊型(複数日)サイクリング	2.98	1.53	2.57	1.45	2.71	1.49
サイクリングを楽しむ	4.39	1.11	4.53	0.95	4.48	1.01

参加動機に関する項目の平均値を表2に示した。最も高い値を示したのは、「サイクリングを楽しむ」(4.48)で最も低かったのは「宿泊型(複数日)サイクリング」(2.71)であった。居住地の異なる2群間で統計的に有意な差が認められたのは、「家族との交流」「宿泊型(複数日)サイクリング」の2項目だけであった。「家族との交流」では、「県外」参加者の評

価が高かったが、家族同伴で参加しているサイクリストの割合に有意な差は認められなかった。また、「宿泊型(複数日)サイクリング」の評価では、「県内」参加者の評価が高かったが、「県内」参加者ほど「日帰り」参加の割合が高かった。これらの結果から、参加動機で評価に差が見られた2項目の原因については、参加者の居住地以外の要因が関連している可能性があり、さらなる分析が必要と思われる。

3) 満足度評価

表 3. 大会企画・運営の評価と満足度の平均得点

項目	県内 (n=177)		県外 (n=93)		全体 (n=270)	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
広報	4.15	0.94	4.03	0.91	4.11	0.93
開催地	4.47	0.85	4.51	0.77	4.48	0.82
利便性	4.15	0.93	3.82	1.00	4.04	0.97
開催時期	4.32	0.97	4.33	0.83	4.33	0.92
参加費	3.77	1.09	3.87	0.91	3.80	1.03
参加賞	3.82	1.06	3.83	0.94	3.82	1.02
コース	4.26	0.96	4.23	0.85	4.25	0.92
トイレの数	4.03	1.04	3.90	1.15	3.99	1.08
エイドステーションの数	4.39	0.94	4.30	0.94	4.36	0.94
エイドステーションの場所	4.27	0.98	4.18	0.98	4.24	0.98
エイドステーション補給食	4.29	0.89	3.98	1.14	4.18	1.00
スタッフの対応	4.59	0.76	4.63	0.67	4.60	0.73
参加者間の交流	4.09	0.94	3.96	0.86	4.04	0.91
開催地住民との交流	4.03	0.94	3.88	0.87	3.98	0.92
サイクリングの満足度	4.55	0.71	4.43	0.74	4.51	0.72
大会全体の満足度	4.50	0.78	4.49	0.70	4.50	0.75

イベントの属性についての評価とイベント全体の満足度について、居住地別に求めた平均値を表3に示した。サンプル全体で評価が最も高かったのは「サイクリングの満足度」(4.51)で、最も低かったのは「参加費」(3.80)であった。「大会全体の満足度」も高く(4.50)、参加者の評価が高いイベントと言える。

居住地によって評価に有意な差が見られたのは、「利便性」と「エイドステーションの補給食」で、いずれの項目でも「県内」参加者の評価が「県外」参加

者の評価より高かった。「イベント全体の満足度」の評価については、「県内」「県外」で平均値に有意な差は認められなかった。

4) 満足度を規定する要因の比較検討

ここでは、大会全体の満足度は、大会の企画・運営に関わる15項目への評価によって規定されると仮定する、いわゆる多属性態度モデルの考えに基づいて分析を進めた。前述のように、分析ではイベント全体の満足度評価（5段階）を従属変数、大会の企画・運営に関わる15項目に対する評価（5段階）それぞれを独立変数として重回帰分析を行なった。サンプル全体、県外、県内の3つの分析を行い、イベント全体の満足度評価に影響する独立変数をステップワイズ法によって選択した。分析の結果を表に示した。

「県外」「県内」の分析結果ともに、 R^2 値が0.7を上回っており、調整済みの決定係数も比較的高く統計的にも有意なモデルが得られた「県外」参加者のみの分析では、「サイクリングの満足度」「コース」「開催地」の3項目がイベント全体の満足度を説明する有意な変数として選択された。また、「県内」参加者では「サイクリングの満足度」「スタッフの対応」「参加賞」の3項目がイベント全体の満足度を説明する有意な変数として選択された。「サイクリングの満足度」は共通して選択されたが、その他は異なっており、参加者の居住地によって「イベント全体の満足度」を左右する要因が異なることが示された。また、居住地域の差を考慮せずにサンプル全体で行なった重回帰分析では、「県外」で統計的に有意とされた「コース」の項目は有意な説明変数から外れる結果となった。

考察

これまでの分析結果から、大会に対する参加者の評価は全体的に高いイベントと言える。「サイクリングコースの風景」（4.10）や「開催地の美味しい食べ物」（4.26）がイベント参加の動機として高く評価されている。なかでも、「サイクリング自体を楽しむ」（4.48）とする動機が最も強い動機であることが明らかになった。サイクリングイベントの企画・運営にあたっては、サイクリングの本質的な楽しみを理解し、いかにしてイベントの内容に具体化させるのが重要な課題である。

来年度以降の大会への参加意図とその理由の自由記述欄では、参加したい理由として「景色が最高」「海が綺麗」など開催地特有の風景について評価する記述が多く見られた。また、次年度以降にも参加したい理由として「坂が多い」「坂が良かった」「激坂が楽しめる」といった記述も多く見られ、コースのアップダウンも、参加者の満足度を高め、再参加意欲を掻き立てる要因として重要であることがわかった。こうした、サイクリストに特有の「楽しみ」を理解することが、参加者を満足させるイベントの企画・運営に必要であると言える。

また、イベント全体の満足度を規定する要因として「サイクリングの満足度」や「コース」だけでなく「スタッフの対応」や「参加賞」といった項目も重要なポイントとなることが明らかになった。しかし、大会全体の満足度を左右するこれらの項目の重要度は、参加者の居住地によって異なり、「県内」「県外」の差によって、その影響力が異なっていた。「県外」の参加者では、「コース」「開催地」といったサイクリング活動の

表4. 居住地別の重回帰分析結果

説明変数	居住地区分								
	県内 (n=177)			県外 (n=93)			全体 (n=270)		
	B	SE B	β	B	SE B	β	B	SE B	β
サイクリングの満足度	0.51	0.05	0.46 ***	0.53	0.07	0.56 ***	0.47	0.05	0.45 ***
スタッフの対応	0.42	0.05	0.41 ***	—	—	—	0.36	0.04	0.35 ***
コース	—	—	—	0.22	0.06	0.27 ***	—	—	—
参加賞	0.11	0.03	0.15 ***	—	—	—	0.09	0.03	0.12 ***
開催地	—	—	—	0.16	0.06	0.18 *	0.09	0.04	0.10 *
Multiple R ²	0.79 ***			0.70 ***			0.74 ***		
Adjusted R ²	0.78 ***			0.69 ***			0.74 ***		

基準変数：イベント全体の満足度

* p<0.05, **<0.01, *** p<0.001

コアな要素がイベント全体の満足度を規定する要因として有意であったのに対して、「県内」の参加者ではこれらの項目は有意ではなく、「スタッフの対応」や「参加賞」といったイベントに付随する機能に対する評価が有意であった。このように、参加者の居住地によってイベント全体の評価に影響する要因に違いがある原因としては、居住地によってイベント参加の位置付けが異なっている可能性が指摘できる。「県内」参加者にとっては、日常的なサイクリングの延長上に位置付けられる「おおすみ地域でのサイクリング活動としてイベント参加」であるのに対して、「県外」参加者にとっては、「イベント参加」は「宿泊を伴う旅行」となる。言い換えれば、「県外」参加者は「県内」参加者に比べて参加にかかる様々なコスト（経済的、時間的、心理的など）が高く、そのコストに見合った満足が得られたかどうか、がイベント全体の評価につながりやすいのではないだろうか^{iv}。同様のコストをかければ、別の地域で開催されるイベントへの参加機会が確保できるのであれば、よりコスト・ベネフィットを意識したイベントの選択と評価が行われても不思議ではない。

このように、「県内」と「県外」の参加者では、イベント全体に対する満足度を規定する要因に差が見られたことから、イベントの企画・運営においては、参加者ターゲットをより具体的に想定する必要があると言える。また、スポーツイベントを単なる催しとして捉えるだけでなく、スポーツツーリズムのコンテンツとして考えていく必要もあるだろう。例えば、イベントの参加費は旅行費用の一部であるという認識や宿泊施設からスタート会場までの移動を含めた配慮も必要であろう。今後もツール・ド・おおすみを成功させるためには、参加者の特性を把握しながら、その内容をイベントの企画に結びつけるマーケティング志向の運営が重要になる。本研究のように、鹿児島「県」という単位で「圏」を設定するのか、「大隅半島」という地域で「圏」を設定するのかなど、今後も研究の蓄積が求められる研究分野と言える。

まとめ

本稿では、鹿児島県鹿屋市を中心に開催されるサイクリングイベントである「ツール・ド・おおすみ2018」の参加者を対象とした調査で得たデータについて「県内」「県外」居住者にどのような差異があるのかを検

討してきた。その結果、居住地の異なる2群間で性別、年齢、参加回数などの属性に差は認められず、参加の動機と満足度評価では一部の項目で有意な差が認められた。また、イベント全体の満足度を規定する要因は「県内」「県外」の参加者では異なり、県外参加者では、サイクリング自体の楽しみに繋がりやすい項目がイベント全体の満足度を規定するのに対して、県外参加者では「参加賞」などイベント参加に付随する要素が満足度を規定していた。これらの結果から、県内参加者と県外参加者では、イベントの満足度評価において、異なった評価の構造を持っている可能性が示唆された。

本稿は2018年度重点プロジェクト（CASE）の一部である。

参考文献

山口 泰雄, 野川 春夫, 菊池 秀夫, 地域活性化に及ぼすスポーツイベントの研究, 日本体育学会第42回大会号, 1991, p.145.

原田宗彦, スポーツイベントの経済学, 平凡社新書, 2002

- i 種子島ロケットマラソンは2018年の第30回大会で終了した。その原因として、「鹿児島マラソン」との競合が指摘されている。その詳細については、NHKが「クローズアップ現代 マラソン大会ウォーズ～激化する市民ランナー獲得競争～（2017年11月8日O.A.）」でも取り上げた。
- ii 2019年に開催された「鹿児島マラソン」は「東京マラソン」と同一日程で開催された。大会主催者は、こうした日程の競合が参加者の募集にどの程度影響を与えているのかを把握する必要性がでてくるとも予想される。
- iii 「inbound: インバウンド」という用語は、海外からの「訪日外国人旅行者」を指す言葉として使われる。ここで使用した「圏外からの参加者」とは、一般生活圏として想定される地域（圏）を超えて訪れる旅行者の意味で使用した。本研究では鹿児島県以外からの参加者を「県外」参加者とした。

- iv 分析結果には示していないが、イベント参加のために支払った宿泊費の平均は、県内参加者が¥5,298であったのに対して、県外参加者では¥17,047と大きな差があった。また、日帰り参加者の割合は、県内参加者の81.9%に対して、県外参加者では38.7%であった。